
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

深谷城跡(第3次)

1991.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

ふか や じょう せき
深 谷 城 跡 (第3次)

1991.3

深谷市教育委員会

序

最近の発掘調査例の増加により、深谷市にも数千年の昔から数多の人々が様々な足跡を幾重にも残していることが確認されております。なかでも埼玉県旧跡に指定されている深谷城跡は、深谷市の歴史を語るうえで欠くことのできない史跡であり、深谷誕生の礎とも言うべき深谷城の築城なくして現在の深谷市はなかったと言っても過言ではありません。現在深谷城跡には、深谷小学校をはじめ市民文化会館、コミュニティセンター、市立図書館、城址公園などがあり、かつての要害の地は、市民の教育・文化の中心地に、また、市民の心潤う憩いの場に変貌を遂げております。

さて、昨今の社会状況の著しい変化のなかで、生涯学習の重要性は人々に深く認識されることとなり、急激に都市化が進行しつつある深谷市でも、生涯学習施設の一層の整備充実が切に望まれております。

こうした市民の皆様の御要望にお応えするべく、発展を続ける市にふさわしい規模と最新の施設を備えた新しい市立図書館が、深谷城跡の一画に昨年完成しました。昨年平成2年は市制施行35周年であるとともに、郷土が誇る偉人青淵・渋沢栄一翁の生誕150周年に当たります。この良き年に、深谷市の生涯学習の中核ともいうべき新図書館が、深谷上杉公ゆかりの地に開館の運びとなりましたことはまことに喜びに堪えず、また、歴史の不思議な縁に思いを馳せずにはいられません。

新図書館が建設された場所は、その近辺に深谷城本丸を囲む内堀跡があるものと推定されておりました。着工に先立ちまして発掘調査を実施しましたところ、果たして内堀跡そのものが数百年ぶりに姿を現しました。その、偉容を眼の当たりにしますと、歴史の重みが圧倒的な質感をもって身に迫ってまいります。先人が積み重ねた業績に恥じぬよう、これからの深谷市を創造していく我々に与えられた使命の重大さに、改めて心身共に引き締まる思いがいたします。

ここにその発掘調査の成果をまとめるにあたり、より良き深谷市を創るためのさらなる努力精進を誓うとともに、関係者の皆様に深く感謝申し上げ、合わせて新図書館が大いに活用されることを祈りまして、本報告書の序といたします。

平成3年3月

深谷市教育委員会

教育長 鳥塚 恵和男

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市仲町19番2号の深谷市立図書館建設に伴う、深谷市 No.60-108遺跡（深谷城跡）の発掘調査報告書である。調査は、深谷城跡第3次発掘調査として実施した。
2. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり実施した。現地発掘調査期間は平成元年3月9日～3月30日である。
3. 調査経費は、深谷市が負担した。
4. 現地発掘調査中の写真撮影、遺物の写真撮影及び本書の執筆・編集は、澤出晃越が行った。
5. 遺構・遺物の実測及び実測図のトレース、拓本等は、調査参加者全員で行った。
6. 遺構の説明における数値は確認面においてのものである。また、挿図中の方位は座標北を示している。

発掘調査の組織

調査主体者 深谷市教育委員会 教 育 長 鳥塚恵和男
教育次長 坂本幸一郎（昭和63年度）
飯島光武（平成元年度）
永井新八（平成2年度）

事 務 局 深谷市教育委員会社会教育課 課 長 飯島光武（昭和63年度、平成元年度兼務）
永井新八（平成2年度兼務）
課長補佐 橋本征彦（昭和63年度）
須長欣二（平成元・2年度）
文化財保護係長 田中島功
庶務係長 金子信子
主 任 関根広子
主 事 古池晋禄

調査担当者 深谷市教育委員会社会教育課 主 事 澤出晃越

調査参加者 相沢恵、朝倉なほみ、宇賀地桂子、大原黎子、加瀬律子、加藤佳子、佐々木由紀子、
里山まり子、島津芳子、清水清子、首藤順子、鈴木令子、関口より子、関根仁子、
高橋豊子、滝口知子、玉瀬静枝、友松扶慈子、西井れい子、土師澄子、湯沢直子、
飯島秀治、岡島夏江、織田志郎、加藤真貴子、小林貴彦、清水美紀、瀬戸正義、
西倉栄
河合詔子、久米紀子、小沼和子、砂田伊久子、都築百合子、細川ケイ、水野祥代、
本橋玲子、森光代、渡辺哲子

目 次

序	
例言	
目次	
I. 発掘調査に至る経過	1
II. 深谷城跡の地理的環境	2
III. 深谷城について	5
IV. 調査の概要	8
V. 出土遺物	11
(1) A区の出土遺物	11
(2) B区の出土遺物	13
VI. まとめ	16
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	第5図 A区の出土遺物
第2図 調査区位置図	第6図 B区の出土遺物
第3図 調査区会測図	第7図 深谷城跡推定図
第4図 土層断面図	

I. 発掘調査に至る経過

東京都心から北西へ約74km、埼玉県北部に位置する深谷市も、最近では様々な社会的状況変化の影響を大きく受け、農業粗生産高は県内市町村随一を維持しながらも、首都通勤圏都市としてその姿を変貌させつつある。人口は現在約94,000人であるが、最近では毎年約1,500人ずつ増えており、その数も年々上昇する傾向があり、100,000人を越えるのも近いことと推定される。また、工業団地も御陵威ヶ原地区を中心に拡大しつつあり、さらに商業も上柴地区を中心に発展している。

こうした状況の変化に伴い、市民生活上のニーズは益々多様化しているが、教育・文化面における市民の行政に対する要望は、特に顕著なものといえよう。学校教育に関しては勿論であるが、社会教育、特に生涯学習に対する一般の関心が最近非常に高まっている。

市民の学習の場の一つの核となるのが市立図書館である。深谷市では昭和46年に市立図書館を建設しているが、最近の多様化・膨大化した市民のニーズに応えるべく、さらに規模を拡大し、種々の機能を備えた、正に生涯学習活動の核となりうる図書館を新たに建設することが計画された。

その用地は、旧市立図書館とは道を挟んだ西側にあたる、旧深谷幼稚園敷地が選定された。この用地周辺一帯は、市民文化会館、市産業会館、市立深谷小学校、県立青年の家等の公共施設が集中しているが、中世における深谷上杉氏の拠点、深谷城跡として知られ、城址公園なども建設されている。

ところで、昭和61年7月～8月に、都市計画街路築造工事に伴い深谷城跡の第1次発掘調査を実施した。この時、調査成果や城跡の古図などをもとに、現在の地図上に城の縄張りの復元を試みたが、その際、今回の新図書館建設予定地は本丸北辺を画する内堀跡に隣接するものと推定された。そこで、平成2年2月20日に確認調査を実施したところ、内堀跡そのものが検出され、その北半は旧深谷幼稚園舎の建設等により既に深く攪乱を受けていることも判明した。この結果をもとに市教育委員会は、深谷城跡の記録保存のため、新図書館建設前に当該地の発掘調査を実施することにし、急遽発掘調査計画を立て、体制を整えることになった。新図書館の建設計画等を含めて検討の結果、調査は昭和63年度内に行うべきであるため、平成元年3月に実施することになった。

II. 深谷城跡の地理的環境

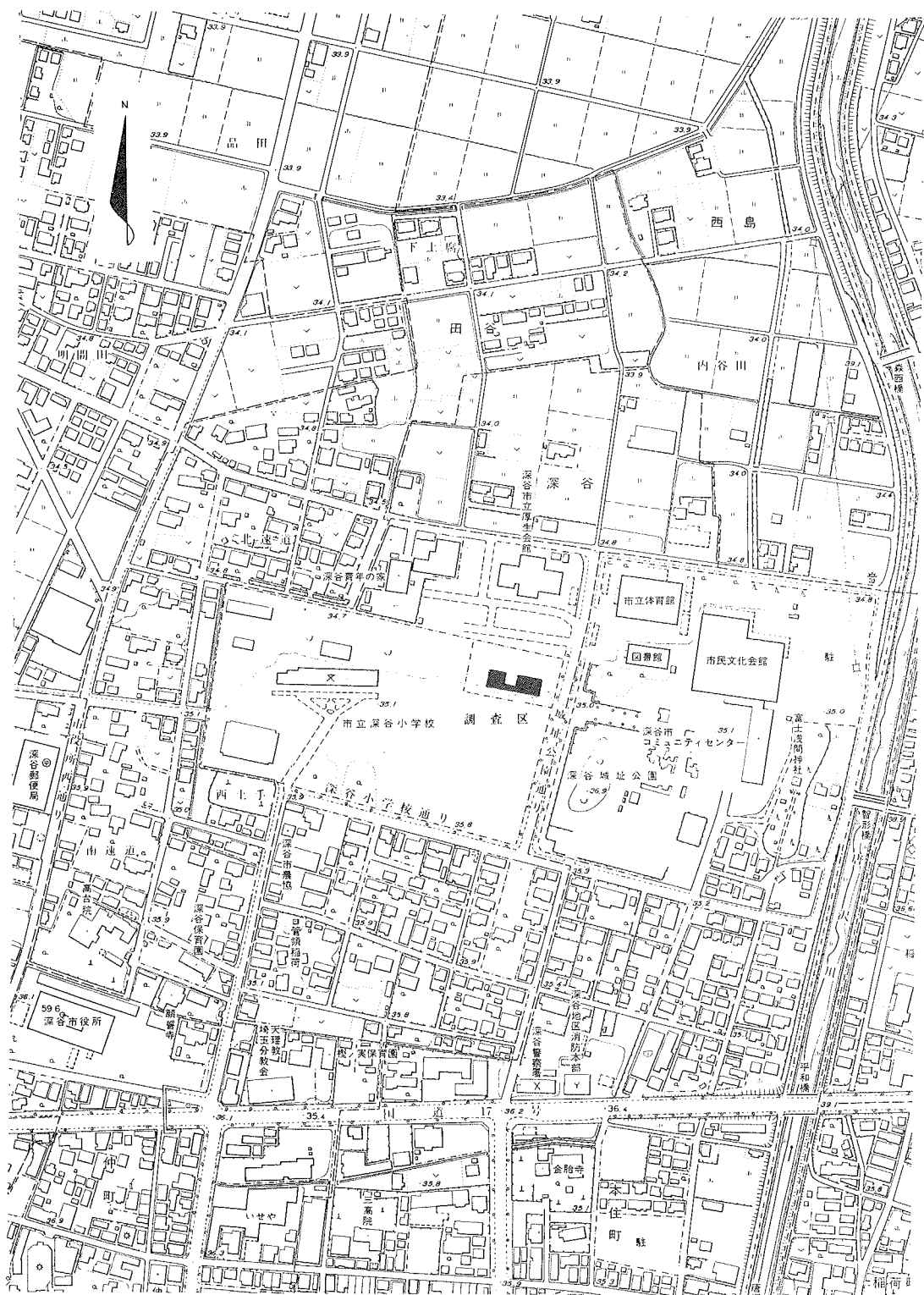
深谷城跡は、J R高崎線の北約800m、現在の深谷市中心部の北側にある。平坦な低地上で、標高は約35mである。城跡は、東西約500m、南北約600m、面積約19.8haに及び、堀や土塁を周囲に巡らせ、本丸を中心に二丸・西丸・北曲輪・越中曲輪・東曲輪・掃部曲輪などの曲輪を回りに配した複郭式の構造をなしている。その平面形態が木瓜の花または実の断面に似ているといわれ、別名木瓜城とも呼ばれている。

深谷市とその周辺は、地形的には南半を占める櫛挽台地と、北半を占める妻沼低地から成っている。

櫛挽台地は、荒川的作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御陵威ヶ原段丘）とで、段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJ R高崎線沿いの崖線で、比高5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面はJ R高崎線から北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近の標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が33～36m、妻沼低地が30～32mである。櫛挽面の西には、岡部町山崎山などの松久丘陵を挟んで立川面に比定される本庄台地が広がっており、寄居面の南側には、荒川を挟んで下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘、標高98.0mの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高77.4mの観音山がある。なお、台地北端の櫛挽面と寄居面の境界付近に、深谷断層と呼ばれる活断層が確認されている。

妻沼低地は利根川流域の広大な沖積低地である。南は荒川低地に続き、東は加須低地に連なっている。妻沼低地内は、利根川的作用により自然堤防が発達していたものと思われ、深谷市内には血洗島、矢島、大塚島、内ヶ島などの島地名が多いこともこのことを裏付けている。現在は、土地改良等によりかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、深谷市遺跡詳細分布調査（調査主体は深谷市教育委員会）や国道17号線深谷バイパス建設工事に伴う遺跡発掘調査（調査主体は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団）などにより、遺跡が島地名の土地を包括してかなり密集した状態で東西に連続していることが確認された。このことは自然堤防の様子をよく表しているものと思われる。なお、妻沼低地の南端部、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一面に深谷市の中心部市街地があり、周辺では開発が急速に進行している。

深谷城跡は、現在の中心部市街地の北側にある。北および西には低湿地が広がり、東は北流する唐沢川を挟んで寄居面北端部に接し、南は小規模な城下町が形成されていたようである。深谷城は、同じ頃に上杉方が古河公方足利成氏の攻勢に対抗するために築造した江戸城や岩付城などと同様に、低地の条件を十二分に考慮して構築された防禦堅固な平城であった。



第2図 調査区位置図 (1/5,000)

Ⅲ. 深谷城について

深谷城は、平坦な低地に築かれたいわゆる平城であった。深谷上杉氏の上杉房憲が、康正2年(1456)に築いたという説が有力である。

深谷上杉氏は、14世紀の後半頃、庁鼻和(現在の深谷市国済寺)に城を構えた上杉憲英を祖とする。憲英は、関東執事から関東管領となった山内上杉氏の祖、上杉憲頭の子である。憲頭は、いわゆる観応の擾乱において足利直義方についたため、一時は足利尊氏から一切の役職を剥奪されたが、貞治元年(1362)に上野・越後両国守護に復職している。このため、上野国を本拠地として越後国方面でも足利幕府に反抗していた南朝方の新田義宗や義治らを鎮圧することや、関東から越後国への通路の確保などを主要な目的として、憲英が憲頭に命じられて庁鼻和城を築いたと考えるのが最も自然であろう。憲英も後に上野国守護や奥州管領に任じられた可能性が高い。

ちなみに、庁鼻和城の東には、上野国へぬける主要道が南北に通っていたといわれ、新田義貞の鎌倉攻めや上杉禅秀の乱における山内上杉憲基の進攻などの経路であったともいわれている。なお、庁鼻和城の北辺は、現在旧中山道が東西に通っている。

憲英の子憲光と、さらにその子の憲長は、応永23～24年(1416～17)の上杉禅秀の乱に、山内上杉憲基方として参加しているが、憲光の弟の憲国は上杉禅秀方となっている。これは、この禅秀の乱に象徴される、惣領制の解体や在地領主制の形成など、当時の東国武家社会内部のダイナミックな変化を知る一例として捉えることができよう。憲光は文安2年(1445)に没し、憲長は後に熊谷市広瀬へ蟄居して(原因不明)宝徳3年(1451)に没したと伝えられるが、憲光・憲長ともに禅秀の乱で討死したとする系図もある。なお、憲長の子の憲武は、深谷市人見にある人見氏の館跡を改修して居住し、人見屋形を称したといわれる。

憲長の弟の憲信は、私市(騎西)城主とする系図もあるが、騎西町にはそれを裏付ける資料等は今のところないようである。“固鼻和(庁鼻和)ニオル”と記した系図もある。永享10～11年(1438～1439)の永享の乱、永享12年～嘉吉元年(1440～1441)の結城合戦などに参加しており、主に山内上杉家の家宰である長尾景仲と行動をともし、景仲とともに“両大将”と記された文書もある。また、憲信は後の古河公方足利成氏と上杉氏の抗争においても奮戦している。没年は不詳であるが、諸系図に載る命日は正月21日又は22日となっている。足利成氏の書状をもとに、康正2年(1456)12月の成氏の私市城攻めに敗れて負傷し、翌年正月21日又は22日に亡くなったとする説がある。しかし、同書状のなかに、享徳4年(1455、7月に康正に改元)正月21日及び22日の高幡・分倍河原の合戦において成氏が上杉右馬助入道を討取ったことがみえ、この上杉右馬助入道が憲信である可能性がある。合戦の日付と憲信の命日が一致することも(系図でも21日か22日か特定できない点も含め)単なる偶然とは考え難い。いずれにせよ、憲信をめぐるこうした混乱した状況が深谷城の築城に深く関わったことは十分に考えられるところであろう。

憲信の子が房憲である。深谷城の築城者を憲英又は憲信とする説もあるが、先述したように、深谷城は房憲により康正2年(1456)に築かれたとする説が、現在最も有力である。その根拠は、『鎌倉大草紙』にある、「又敵方には武蔵国には上杉武蔵入道性順(憲信)息男房頭(房憲のあやまりか)

は武蔵人見へ打て出、上州の味方と引合、深谷に城を取立ける」(括弧内筆者)という、康正2年10月の古河公方足利成氏と深谷上杉氏の戦闘の記載である。また、この説は当時の周囲の状況を考慮しても肯首しうところである。当時、上杉方は、足利成氏との戦闘に備え、太田資清・保資(道灌)父子に命じて河越城・岩付城・江戸城などを築かせたが、深谷城もこうした上杉方の防禦線形成の一環として築城されたものと考えられよう。深谷城をふくめ、いずれもが低地上の平城であることも注意しておくべきである。なお、『新編武蔵国風土記稿』によれば、深谷市伊勢方に伊勢方城跡があり(その場所ははっきりしない)、深谷城築城の際に仮城として築かれたものという。

房憲の孫の憲賢の頃になると、小田原北条氏の進出が著しくなった。北条氏の関東支配を決定づけた史上有名な天文15年(1546)の河越夜戦に、憲賢が山内上杉憲政方の一将として参戦していた可能性もある。しかし、憲政がその居城であった平井城落城により越後国に逃れた後は、憲賢は北条氏康に服したようである。憲賢の子憲盛は、上杉謙信の関東攻めの際には謙信に従い、永禄4年(1561)の小田原城攻めには謙信直属の将として参加した。しかし、謙信が越後国に引き上げた後は、再び北条氏に服し、元亀4年(1573)には憲盛は、北条氏政・氏邦と和睦の誓紙を交わし、深谷上杉氏は事実上鉢形城主北条氏邦の傘下に入ることとなった。この時、憲盛の子氏盛は、北条氏政の娘を娶り、名を氏憲と改めた。深谷上杉氏が完全に北条氏に帰属したため、この後深谷城が上杉謙信や武田信玄・勝頼に攻められたことが記録にみえる。こうした状況から、いわゆる戦国時代において、大勢力の狭間にあった小氏族の苦況を如実に窺い知ることができる。

天文18年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの際、深谷城主氏憲は小田原城に籠っており、深谷城は重臣の秋元長朝、杉田因幡らが守っていた。しかし鉢形城が陥落し、さらに前田利家、浅野長政らの大軍が本庄、岡部付近に迫るに及び、秋元長朝らは大勢をみて降伏し、深谷城は無血開城され、ここに深谷上杉氏の歴史は幕を閉じた。なお、深谷上杉氏の時代には、深谷城の東約2.5kmに東方城、北約0.8kmに皿沼城、西約2.0kmに曲田城(谷之城)、南約1.6kmに秋元氏館と、深谷城の四方に出城的な城塞が随時築かれていたようである。

徳川家康が関東に入った後は、深谷城にはまず松平(長沢)康直が一万石で入ったが、分禄2年(1593)に病死した。その後家康の子の松千代が入ったが8才で早逝し、さらにその弟の辰千代が長沢松平を継いで名を松平忠輝と改め、慶長3年(1598)より深谷城主となった。忠輝は慶長7年(1603)に下総国佐倉に移封され、深谷城は少しの間城主を失ったが、慶長15年(1610)に松平忠重が封ぜられた。忠重は元和元年(1622)に上野国佐貫に移封され、替わって酒井忠勝が入封した。忠勝は寛永元年(1624)には老中となり、寛永3年(1626)に忍へ移封され、深谷城は廃城となった。深谷領は寛永11年(1634)に代官支配地となり、正保元年(1644)深谷城は取り壊された。元禄5年(1692)には深谷城跡の開墾が許され、その後は土塁と堀の一部を残してほとんどが耕地化されていったようである。

深谷城跡は、昭和の初め頃まではその形状をよく留めていたらしいが、現在はほとんどが開発されて宅地や学校などの公共施設になっており、外堀と土塁のごく一部が残っているのみである。外堀は城域の東隅の智形神社の周囲に南北延長約50mほど残っており、最大幅は約13mである。周辺の家屋からの雑排水などが流れ込み全くの下水となってしまったため、地元からの要請もあり安全・衛生面

を考慮して、全体が枯山水風に改修された。智形神社と市コミュニティセンターの間を南北に流れる排水路も堀跡を利用したものらしい。土塁は、小規模なものが市役所の裏にある高台院の西側に延長約10mほど残されており、その北約150mにもわずかに土塁らしき土盛りが確認できる。深谷小学校と国道17号の間にも土塁と思われる土盛りがあり、その上に管領稲荷が祀られている。この付近は以前は城の山と呼ばれ、昭和30年頃まではもっと大きく高かったらしく、石段を登ったということである。深谷小学校の南西にある墓地も周囲よりも高くなっており、土塁を利用した可能性がある。この墓地と管領稲荷の間の深谷小学校に通じる南北道路あたりに、昭和の初め頃まで管領の池と呼ばれる池があったらしく、外堀の一部と考えられる。

深谷城の平面構造は『武蔵志』所載の深谷古城図、市内の荻野藤治氏所蔵の深谷城址絵図、旧小字名などからある程度推定できる。昭和62年3月発行の第1次発掘調査報告書において、試みに現在の地図上に模式的に復元した図面を掲載したが、今回の第3次発掘調査の成果も、それと大きく隔たるものではなかったことを付け加えておきたい。

<参考文献>

- 大里郡郷土誌 下田江東編 大正8年
- 埼玉懸史 埼玉県 昭和9年
- 深谷町誌 山口平八編 昭和12年
- 深谷市史 深谷市 昭和44年
- 郷土史事典埼玉県 大村進・秋葉一男編 昭和54年
- 武蔵の古城址 小幡晋 昭和55年
- 深谷上杉氏の歴史 深谷上杉顕彰会 昭和61年

※以上は、当市教育委員会発行の、埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「深谷城跡」より、部分的な改変を加えて転載したものである。

IV. 調査の概要

この発掘調査は、市立図書館の建設に伴い、埼玉県深谷市 No.60-108遺跡「深谷城跡」地内、深谷市仲町19-2の約300㎡について実施したものである。調査主体は深谷市教育委員会で、平成元年3月6日～3月30日に現地発掘を行った。

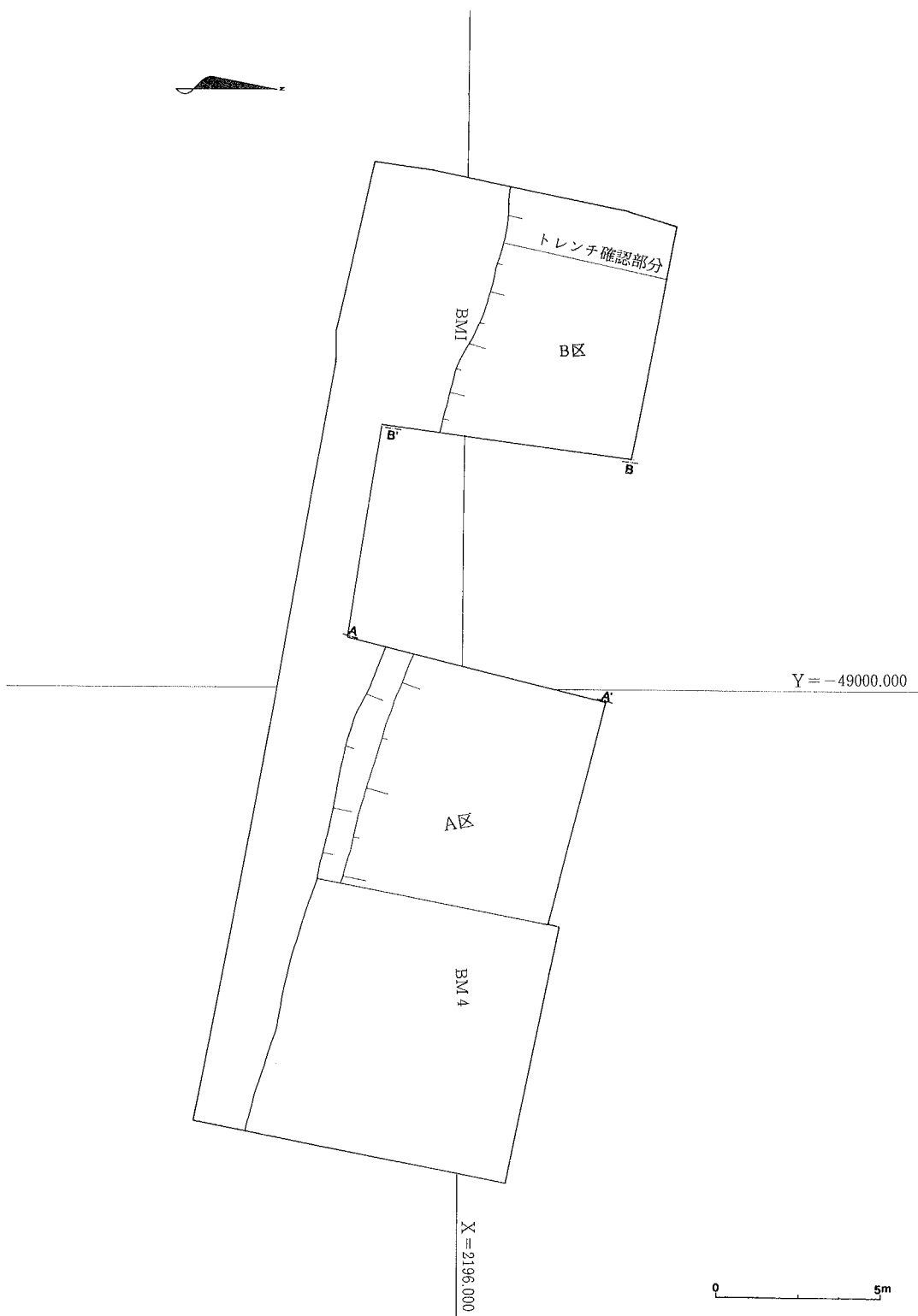
市立図書館建設予定地は、以前旧市立深谷幼稚園園舎の建っていた場所である。このため、事前の確認調査により、建設予定地の北半部は既にかなり深くまで攪乱を受けていることを確認、調査対象から除外した。したがって発掘調査は、結果的に建設予定地の南半部について行ったことになる。また、調査対象区中央の植木（アオギリ）部分については移植予定であり、危険等も考慮して掘削対象から外した。なお、調査にあたっては、中央の植木部分より東側をA区、西側をB区とし、調査区内に座標北の4m四方を基本とするグリッドを設定した。

調査区付近に城の本丸を巡る内堀跡がある可能性が高いことは、古城図や小字名などをもとに、昭和61年度の第1次発掘調査の際に指摘されていた。調査を開始したところ、今回の調査対象区内で予想どおり内堀跡と思われる遺構が検出された。

この内堀跡は、本丸の北辺を形成するもので、東西方向に造られている。かなり大規模なもので幅約10mの調査区全体が内堀跡といった状態であったが、上記の攪乱のために内堀跡の北半は確認できず、内堀自体の幅は不明である。調査結果から推定すると、15～20m程度はあったものと思われる。

調査中は湧水にかなり悩まされ、排水のための電動ポンプが欠かせない状況であった。また、調査区が現市立深谷幼稚園や市立深谷小学校に隣接しているため、児童に対する安全面には特に注意を払わなければならなかった。こうした条件下であったため、人力による掘削は確認面より約0.8m（現地表面から約1.7m）で断念せざるをえなかった。そこで、内堀の底の状態等は、パワーショベルでB区の一部を掘削して短時間で確認した。深さは現地表面から約2.8m、底面での地山は緑灰色粘土であった。なお、ほかに遺構は検出されなかった。

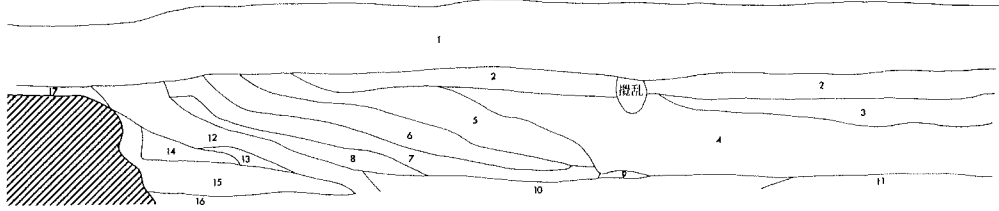
出土遺物はごくわずかであるが、中世から近世のものを主としており、土師質土器（耳皿を含む皿等）、瓦質土器（内耳付土鍋等）、陶器（瀬戸天目茶碗等）、磁器（染付茶碗等）などのいずれも小破片や、煙管（雁首）などである。ほかに縄文土器片や須恵器片なども極めて少量ではあるが出土した。



第3図 調査区会測図 (1/200)

A

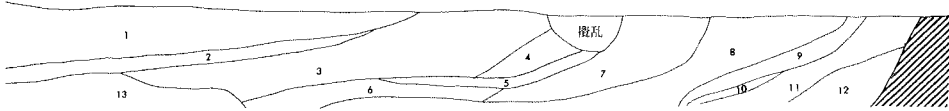
A'



1. 表土（盛土、土と砂の瓦層）
 2. 黒褐色土（Aを少し含む）
 3. "（Aをやや多く含む）
 4. "（砂・小石・ローム粒子を含む）
 5. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。）
 6. 黒褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを含む。ブロックは5より小さい）
 7. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。ブロックは6より小さい）
 8. "（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量を含む。7より暗い）
 9. "（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む）
 10. "（ロームブロック・黄白色及び灰色粘土ブロックを含む。9より暗い）
 11. 黒灰色土（粘土質で緑色帯び、ヘドロ状）
 12. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む）
 13. 黒褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを少し含む）
 14. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを少し含む）
 15. 黒灰色土（ローム粒子・粘土粒子少し含む）
 16. "（粘土質で緑色帯び、ヘドロ状）
 17. 黒褐色土（砂を少し含む）
- ※4層以下は全体に粘質で灰色を帯び、酸化鉄含む。6・7・8・12では段階的な埋没を想定しうる。

B

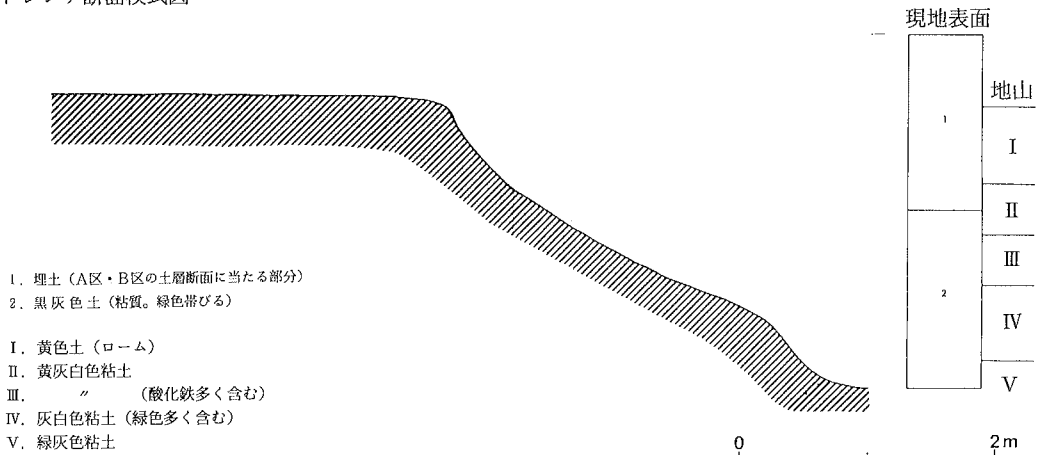
B'



8. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色及び緑灰色粘土多量に含む）
 9. 黒褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。焼土を含む）
 10. 灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを含む）
 11. "（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを少し含む。10より明るい）
 12. "（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを少し含む。11より暗い）
 13. 黒灰色土（粘土質で緑色帯び、ヘドロ状）
- ※全体に灰色帯び、4層以下は酸化鉄を多く含む。
1. 黒褐色土
 2. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。）
 3. 黒褐色土（ローム粒子を少し含む）
 4. "（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。）
 5. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。）
 6. 黒褐色土（ロームブロック・黄白色粘土ブロックを多量に含む。）
 7. 黒灰褐色土（ロームブロック・黄白色及び緑灰色粘土ブロックを多量に含む。）

0 2m

トレンチ断面模式図



1. 埋土（A区・B区の土層断面に当たる部分）
2. 黒灰色土（粘質。緑色帯びる）

- I. 黄色土（ローム）
- II. 黄灰白色粘土
- III. "（酸化鉄多く含む）
- IV. 灰白色粘土（緑色多く含む）
- V. 緑灰色粘土

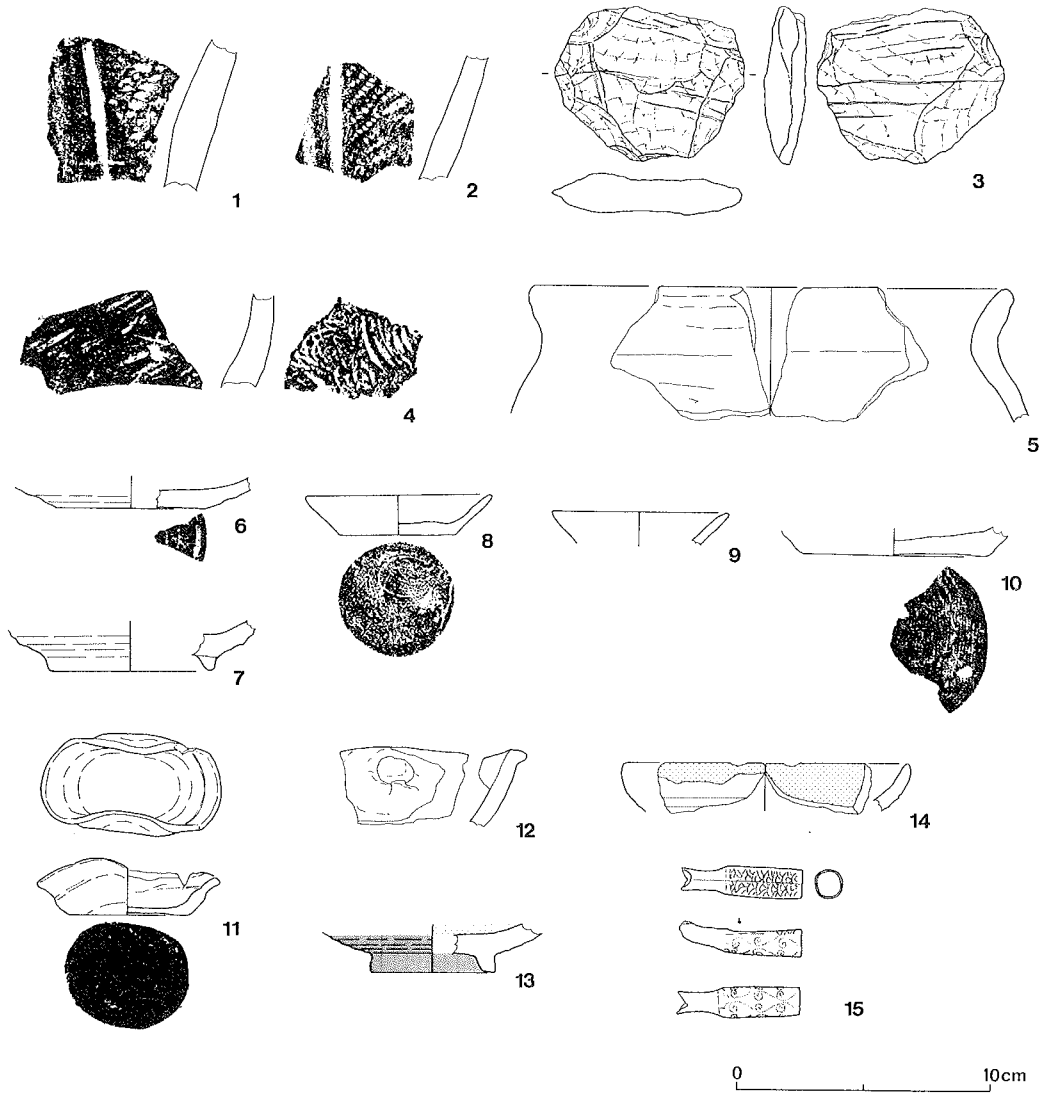
0 2m

第4図 土層断面図（1/60）

V. 出土遺物

(1) A区の出土遺物（第5図1～15）

1. 縄文土器片である。垂下する平行沈線間の縄文が磨消されたものであろう。縄文は比較的目の大きいRL単節。褐色を呈する。
2. 縄文土器片である。垂下する平行沈線間の縄文が磨消されている。縄文は磨滅のためはっきりしないが、RL単節かR無節であろう。外面淡褐色、内面暗褐色を呈する。
3. 約1/2を欠損した分胴型の打製石斧であろう。残存長6.2cm、幅7.4cm、厚さ1.6cm。器面は風化している。ホルンフェルス製。
4. 須恵器瓶の胴部破片であろう。外面に櫛目状の、内面に鱗状の叩き目。胎土細、焼成やや不良で軽質。灰色を呈する。
5. 土師器甕の口縁部破片である。推定口径19cm。器肉は特に頸部がやや厚い。内面はよくナデられているが、口唇部外面の調整はやや雑。肩部にわずかに横方向のへら削りが認められる。胎土細、砂を少し含むが黒雲母状のものが多し。焼成は良好で瓦質に近い。暗褐色～暗灰褐色を呈する。
6. 須恵器杯の底部破片である。推定底径6cm。底面は回転糸切り。胎土細、白色針状物質を含む。焼成良好、灰色を呈する。
7. 土師質土器高台付杯の底部破片である。高台は貼付である。胎土細、焼成やや不良。橙白色を呈する。
8. 土師質の灯明皿である。推定口径7.5cm、器高1.6cm、底径4.6cm。口唇部外面に微量の油煙が付着。口唇部～体部の器肉が極端に薄いことや、胎土・焼成・色調など、他とは明らかに異質であり、搬入品の可能性もある。底面は回転糸切り。胎土細、砂っぽくザラついている。淡灰色を呈する。
9. 土師質皿の破片である。推定口径7cm。灯明皿であろう。小型で薄く、口唇部は少し尖る。胎土細、小石を含む。焼成良。淡褐色を呈する。
10. 土師質皿の底部破片である。推定底径7.5cm。底面は回転糸切りの後ナデられている。胎土細、焼成良、灰褐色を呈する。
11. 土師質の耳皿である。ほぼ完形。口縁部7.1×2.4cm、器高1.1～2.3cm、底径4.6×3.0cm。底面は回転糸切りの後ナデ。胎土細、砂・小石を少し含む。焼成良。褐色を呈する。
12. 瓦質の内耳付土鍋の破片であろう。口唇部は外面に少し突出。内面に内耳の痕跡が残る。外面に炭化物付着。胎土細、焼成良、暗灰褐色を呈する。
13. 陶器茶碗の底部破片である。推定底径5cm。底面を含む外面に濃茶色の鉄釉、内面に灰釉をかけた分けしている。内面には貫入が認められ、外面は水挽き痕が明瞭。なお、畳付は無施釉。胎土やや粗、焼成良、素地は黄白色を呈する。
14. 陶器皿の破片である。推定口径11.5cm。体部は内彎気味に丸く開く。内面全面及び外面口唇部に灰釉が施され、貫入が認められる。胎土細、焼成堅緻、素地は淡黄白色を呈する。
15. 煙管の雁首である。火皿部分を欠損。残存長4.8cm、羅宇側径1.1～1.2cm、胴板の厚さ0.8mm、

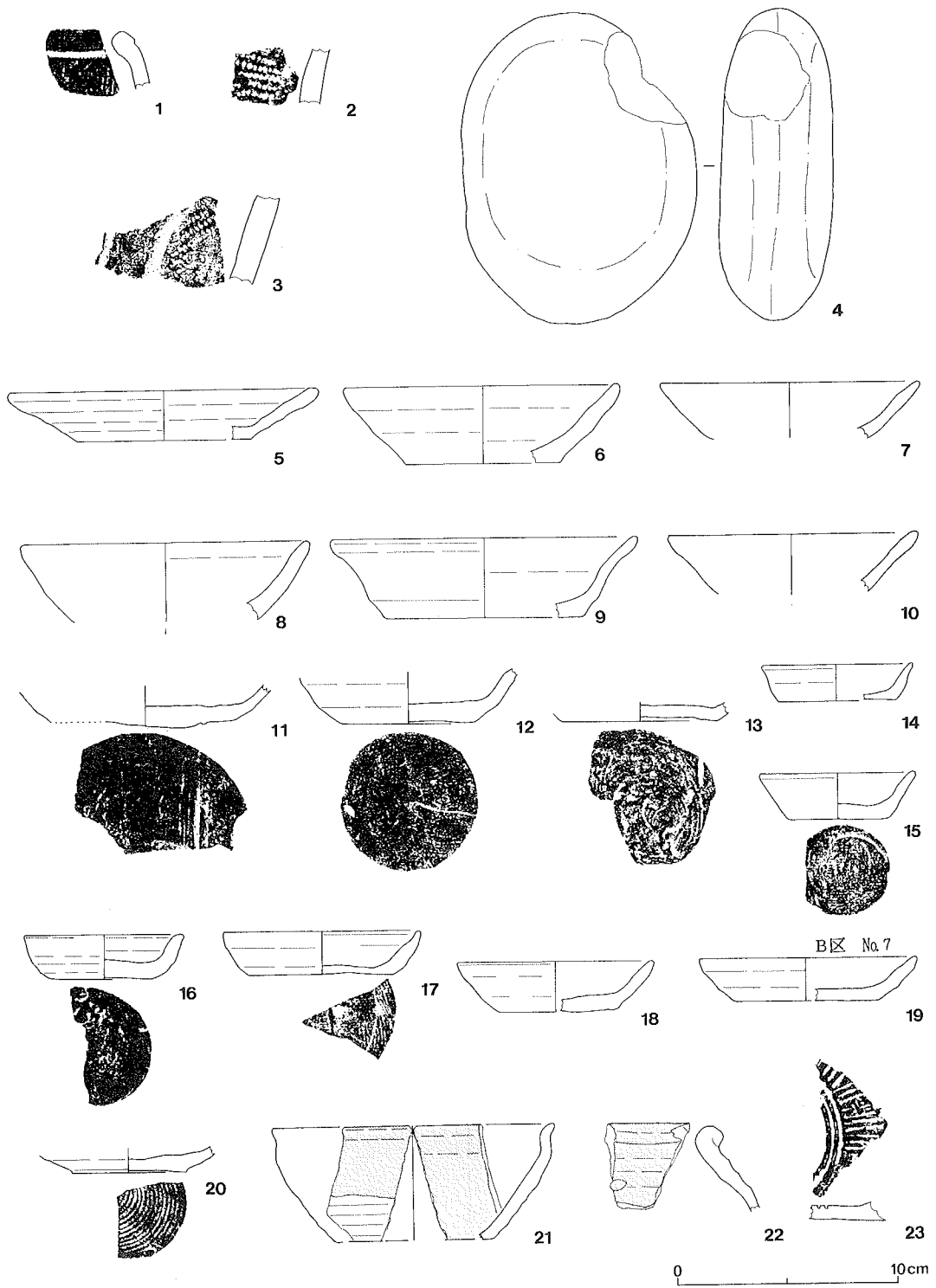


第5図 A区の出土遺物 (1/3)

銅板を丸めて作られている。上側からの圧力により矢印の部分が若干つぶれている。体部には点刻による文様が施されている。全体に緑青がふいているが、一部は銀色である。

(2) B区の出土遺物（第6図1～23）

1. 縄文土器の口縁部破片である。口唇部は内側に少し肥厚する。外面は口唇部直下に沈線が巡り、地文は撚糸文のようだがはっきりしない。胎土細、焼成良、黒褐色を呈する。
2. 縄文土器の破片である。縄文はL R単節。胎土細、焼成良、淡褐色を呈する。
3. 縄文土器の破片である。縄文は摩滅のためはっきりしないが、R L単節であろう。間が磨消された平行沈線が垂下している。胎土はやや粒子の大きい砂を多く含む。焼成良、外面は白土がかかったような状態で橙褐色～灰白色を呈し、内面は橙褐色を呈する。
4. 磨石と思われる。長さ14.4cm、幅10.8cm、厚さ5.2cm。一部欠損。図の上面がよく使用されたようである。石質は輝石安山岩。
5. 土師質土器皿の破片である。推定口径14cm、器高2.3cm、推定底径8cm。かなり開いた浅い器形を呈する。口唇部は若干肥厚し、水挽き痕は全体に明瞭である。胎土細、焼成良好、橙褐色を呈する。
6. 土師質土器杯の破片である。推定口径12cm、器高3.6cm、推定底径7cm。器肉は全体にやや厚い。胎土細、焼成良、淡橙白色を呈する。
7. 土師質土器杯の破片である。推定口径12cm。口縁部がやや開いた器形を呈する。胎土細、焼成良、黒褐色を呈する。
8. 土師質土器杯の破片である。推定口径13cm。体部は丸みをもち、器肉は全体に少し厚い。胎土細、焼成良、淡橙褐色を呈する。
9. 土師質土器杯の破片である。推定口径14cm、器高3.7cm、推定底径9cm。口縁部が外反して、少し開く。胎土細、焼成良、淡橙褐色を呈する。
10. 土師質土器杯の破片である。推定口径11.5cm。口唇部が少し肥厚している。胎土やや粗、焼成良、淡橙色を呈する。
11. 土師質土器皿の底部破片である。推定底径9cm。底部は円盤により形成されたものと思われるが、全体にかなり歪んでいる。底面は回転糸切りの後柁目痕が施されている。胎土細、焼成良、橙褐色を呈する。
12. 土師質土器杯の底部破片である。推定底径6.5cm。底面は回転糸切り。胎土細、焼成良、橙褐色を呈する。
13. 土師質土器皿の底部破片である。推定底径7cm。底面は回転糸切り。胎土細、砂を多く含む。焼成良、橙褐色を呈する。
14. 土師質土器皿の破片である。推定口径7cm、器高1.8cm、推定底径5.5cm。口唇部は薄く、少し外反している。底面は、不明瞭だが回転糸切り後ナデのようである。胎土やや粗、焼成良、淡褐色を呈する。



第6図 B区の出土遺物（1／3）

15. 土師質土器皿である。口径7.2cm、器高2.1cm、底径4.5cm。底面は回転糸切りの後ナデられている。胎土細、焼成良、淡褐色を呈する。
16. 土師質土器皿の破片である。推定口径7cm、器高2.0cm、推定底径5cm。器肉が全体に厚い。底面は回転糸切り。胎土細、焼成良、淡橙褐色を呈する。
17. 土師質土器皿の破片である。推定口径9cm、器高2.0cm、推定底径6cm。体部に比して底部がかなり薄い。底面は回転糸切りの後ナデ。胎土細、焼成良、淡橙褐色を呈する。
18. 土師質土器皿の破片である。推定口径9cm、器高2.3cm、推定底径5.5cm。底面は回転糸切りの後ナデ。胎土細、焼成良、淡橙褐色を呈する。
19. 土師質土器皿の破片である。推定口径10cm、器高2.0cm、推定底径6.5cm。底面は摩滅のためはつきりしないが、回転糸切りの後ナデのようである。胎土やや粗、焼成良、淡褐色を呈する。
20. 灰釉陶器皿の底部破片である。推定底径5cm、底面の一部と内面の一部に灰釉がかかっている。内面の灰釉は径1.3cmほどの円形で、緑色がかかった灰色を呈し、貫入が認められる。底面は回転糸切り。胎土細、焼成堅緻、素地は灰白色を呈する。
21. いわゆる瀬戸天目茶碗の破片である。推定口径6.5cm、白濁した褐色の鉄釉が内面全面及び外面上半部に施されている。胎土細、焼成堅緻、素地は褐色～赤褐色を呈し、割れ口は黄白色を呈する。
22. 鉄釉陶器鉢の口縁部破片であろう。丸い口唇部は外側へ折り返されており、体部は水挽き痕が明瞭である。釉は微小な白点や濃茶点等が重なった細かい斑点状を呈し、外面全面及び、内面口縁部に施されている。胎土細、焼成良好、素地は暗褐色を呈する。
23. 播鉢の底部破片である。内面に比較的深い櫛目が施され、使用痕が残っている。底面は砂底か。胎土細、焼成良好、淡褐色を呈する。

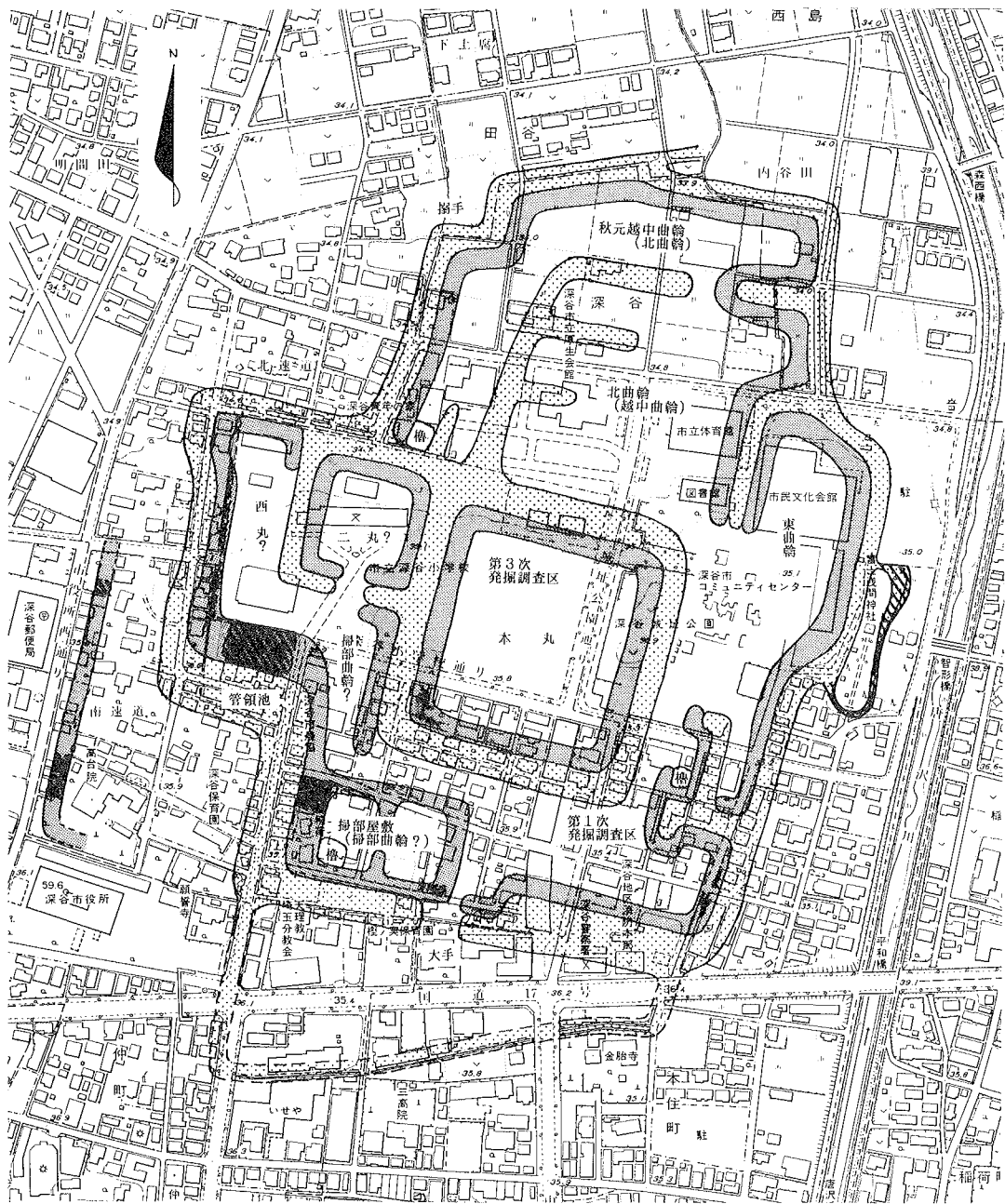
VI. まとめ

昭和61年6月2日～8月8日に、都市計画街路中央通り線工事に伴い、深谷城跡第1次発掘調査を実施した。この時、本丸の南辺の一部と思われる内堀跡と、その南側の大手門付近になるとと思われる外堀跡を確認した。調査報告書の刊行に際し、この調査成果と、『武蔵志』所載の深谷古城図、市内荻野藤治氏所蔵の深谷城址絵図、旧小字などをふまえ、現在の地図上に深谷城の平面構造の復元を試み、掲載した。

この時の推定では、今回の発掘調査対象区は、本丸の北辺を画する内堀跡の南側と考えられた。調査にあたったところ、実際には内堀跡そのものが検出され、本丸北辺の内堀は、第1次調査の時の推定よりもやや南に位置することが判明した。また、幅も予想以上に広く（北側は攪乱のために確認できなかったが、確認できた部分だけでも10m以上、土層断面の状態から推定すれば15～20mほどになるものと思われる）、大手側の本丸南辺の内堀の幅とそう変わらないものと判断された。したがって深谷城跡は、少なくとも本丸についてはかなり幅広く深い内堀によって、周囲を堅固に区画していたことが明らかになってきた。

次ページの第7図は、第1次発掘調査の時に推定した図に、今回の発掘調査成果を考慮して補正を加えたものである。前回の推定に比べて基本的に大きな相違は生じなかったが、今回の調査では、本丸の南北の長さが確認されたことが最も大きな成果といえよう。土塁の部分を含めた南北の長さは約160mになり、当時のほぼ1.5町に相当するものと思われる。したがって少なくとも城本丸の縄張り設計を検討するうえでは、堀の区画規模を基準として計画決定された可能性が考慮されねばなるまい。

もとより、深谷城跡に関する調査成果や研究の基礎資料は未だ極めて乏しく、城跡について実数値を挙げたり、計画状況等を具体的に論じたりするのは余りにも時期尚早に過ぎることは否めない。しかし、その可能性が示唆されただけでも、深谷城跡を研究するうえで、大いなる前進といえよう。深谷城跡が深谷市のシンボルとも言える遺跡だけに、その意義は一層深いものとする。



土塁

堀

0 250m

現在残っている遺構（または遺構と思われる部分）

第7図 深谷城跡推定図（1/5,000）



1. A区全景

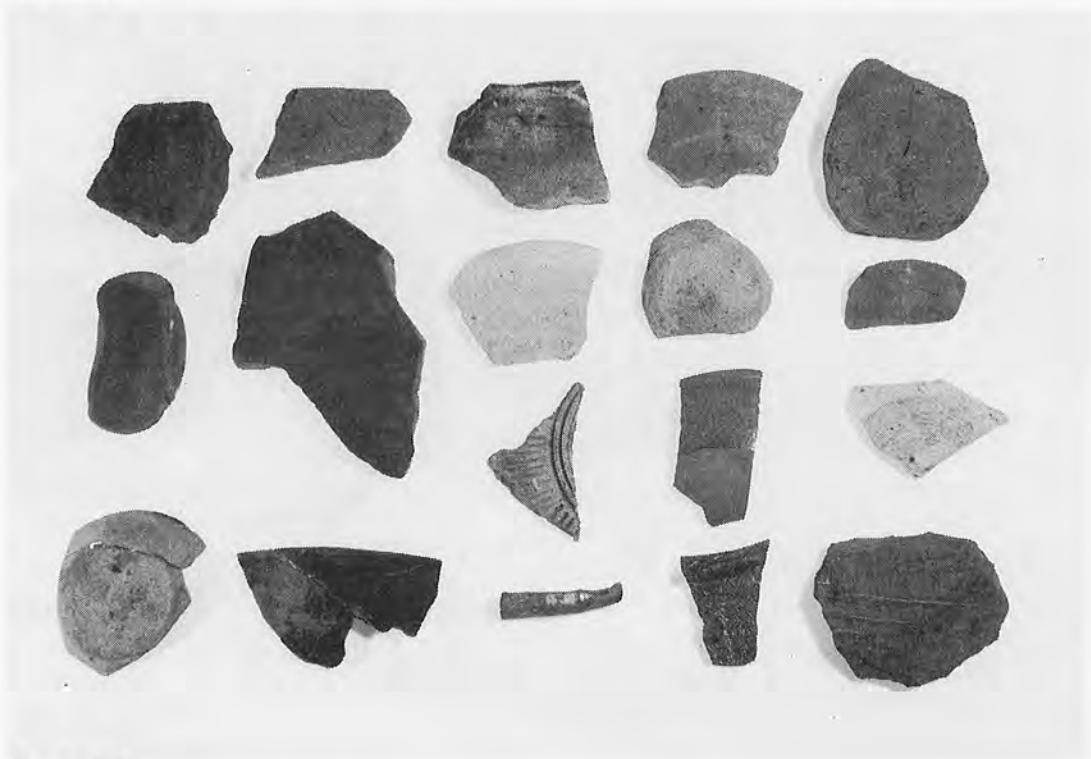


2. B区全景

図版 2



3. 調査風景



4. 出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第27集

深 谷 城 跡 (第3次)

印刷 平成3年3月22日

発行 平成3年3月30日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会

印 刷 大 屋 印 刷 株 式 会 社

「深谷城跡（第3次）」 正誤表

訂正箇所	誤	正
挿図目次 P 6 24行目	第3図 調査区 <u>全測</u> 図 分禄2年	第3図 調査区 <u>全測</u> 図 文禄2年